

「力の誇示も、戦争も、もうたくさんです！」



4月11日に開かれた「平和のための夕の祈り」での教皇レオ14世。教皇自身が世界に呼びかけてバチカンの聖ペトロ大聖堂で行われ、世界に配信された（CNS）

国際

- 平和のための夕の祈り 歴代教皇、「もう戦争はいらない」 2面
- 中東情勢を巡るバチカン等の主な動き 2面
- 神の名 利用し 戦争正当化 「重大な罪」と枢機卿が批判 3面
- 大雨に銃声、それでも参加 ガザ 受難の主日に希望のしるし 3・4面
- 教皇の一般謁見講話 4面
- バチカンの聖週間 5面
- その他の国際記事 6面

国内

- 全国シノドス担当者研修会 「ともに歩む教会」づくりに手応え 7面
- 「子どもと礼拝」プログラム／60回目の中国ブロック高校生大会 7面
- 四旬節に聞く 受洗の物語 8面
- 人物紹介／私の召命物語 8面
- その他の国内記事 8面

- 主日の福音解説 9・10・11面
- 短歌・俳句 11面
- 訃報 12面
- 告知板・番組 12面
- きょうをささげる（5月の祈り） 12面

オンラインで日々ニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」のダイジェスト紙、月刊「カトリックジャパンダイジェスト」をお届け致します。本紙は無料です。

カトリックジャパンニュース 



カトリックジャパンダイジェスト 第13号
発行＝カトリック中央協議会広報部
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館
電話(03)5632-4435 FAX(03)5632-7030

国際

平和のための夕の祈り 歴代教皇、「もう戦争はいらない」

【バチカン4月11日CNS】教皇レオ14世は4月11日、バチカンの聖ペトロ大聖堂で行われた「平和のための夕の祈り」の中で、ますます予測不可能で、攻撃的になる「自分は全能だという妄想」が世界を脅威にさらしている状況に警告を発し、世界の指導者や人々に、憎しみや暴力にとらわれている心と頭を空にして、いのちを奉仕するよう求めた。

「自分や金銭という偶像を崇拝するのはもう十分です！力の誇示も、戦争も、もうたくさんです！真の力は、いのちへの奉仕のうちに示されるのです」と教皇は訴える。

「祈る人は自らの限界を知る人であって、人を殺したり、死をちらつかせて脅かしたりなどはしません。死は、生きておられる神に背を向けた人々を隷属させ、その者たちと彼らの力を、口も目も耳もない偶像に仕立て上げます。その偶像のために、あらゆる価値を犠牲にして、全世界にひざまづくことを強要するのです」

絶えず教皇に手紙を書き送っている子どもたちの声に「耳を傾けましょう」と教皇は述べ、子どもたちは「一部の大人たちが誇らしげに自慢する行為の恐ろしさや非人道性を全て」詳しく教えてくれると語った。

この祈りの集いには、何千もの人々が大聖堂の中と外に集まり、ロザリオの栄えの神秘を唱えた。各神秘が唱えられる前には、各大陸を代表する国々の民族衣装を身に着けた女性たちが、平和の元后聖母マリア像の足下に置かれたアッシジから運ばれた平和の灯を、細いろうそくにともした。

教皇は、祈りは山をも動かすことができるとイタリア語で語った。「戦争は分裂をもたらしますが、希望は一致をもたらします。傲慢さは他者を踏みにじりますが、愛は立



4月11日、バチカンの聖ペトロ大聖堂で行われた「平和のための夕の祈り」でロザリオの祈りを終え、集まった信者たちに手を振る教皇レオ14世(CNS)

ち上がせませす。偶像崇拝は私たちの目をふさぎますが、生きておられる神は光で照らして下さいます」と続けた。「歴史のこの劇的な時に、共に立ち向かうためには」、ほんの少しの信仰が必要だと語った。

愛によって死に打ち勝ち復活した主を信じる者は、「運命の定めには縛られることはありません。人々が、正義もいつくしみも顧みず互いを十字架につけ合い、墓の数が追いつかないほどいのちを奪い続けているこの世界においてさえもです」と教皇は説明する。

教皇は発言の中で、どの紛争かは明示しなかったが、2003年に米国が有志連合からの支援を受けて仕掛けたイラク侵攻中の聖ヨハネ・パウロ2世の熱心な取り組みと平和への呼びかけを思い起こした。

教皇は「聖ヨハネ・パウロ2世の訴えを、今夜私も分かち合います。今日においても意義深いものだからです」と強調し、歴代の教皇たちの「もう戦争はいらない」という呼びかけを改めて繰り返した。

「平和のモザイク」の一片になる

「教会は、和解と平和のために奉仕する、偉大な人々の集まりです。戦争の論理を否

定することが誤解や軽蔑につながるとしても、教会はためらうことなく、その道を歩みます」

教会は「平和の福音を宣言し、人間が持ち得る権威ではなく、神への従順を教えます。他者の持つ生まれた尊厳が、国際法の継続的な違反によって脅かされる時は特にそうです」と教皇は述べた。

祈りと神の助けを借りることで、人々は「悪の凶暴な連鎖を断ち切る」ことができ、神の国への奉仕ができる。神の国では、「剣もドローン(無人機)も、復讐も悪の矮小化も、不公正な利益もありません。ただ尊厳と理解とゆるしだけがあるのです」と教皇は力を込める。

また教皇は、神の名を利用して暴力を正当化することに対して、「いのちの神である神の神聖な名さえ、死について話し合われる場に引きずり込まれている」と言って非難した。

このような方法で神の名を思い起こさせる人は、唯一の天の父のもと、兄弟姉妹たちで成り立つ世界を消し去り、「悪夢」をつくり上げる。つまり、耳を傾け、共に寄り添うよう呼びかけるのではなく、敵と脅威によって出来上がる悪夢だ。

教皇は世界の指導者たちにこう呼びかけた。「もうやめてください！平和を構築する時が来ました！対話と仲介のテーブルに着いてください！再軍備を計画したり、死を招く作戦を決定したりするテーブルにはありません！」

最後に教皇は、世界の人々一人一人が、自らの心と考えから暴力を排除する義務を負い、それぞれの家庭、学校、共同体で日々、平和の国を築く一助とならねばならないと力説した。

「もう一度、愛と節度と正しい政治を信じましょう」と教皇は人々を励まし、それぞれが「平和のモザイク」の一片になるために、学びを深め、「自ら関わって」いくよう求めた。

中東情勢を巡るバチカン等の主な動き

- 3月17日 教皇、中東での即時停戦求める
レバノンの情勢悪化を受けて
- 3月20日 イスラエル、聖墳墓教会等を封鎖
イランによる攻撃警戒、厳戒態勢
- 3月31日 教皇、トランプ氏を名指し
中東での攻撃沈静化求める
- 4月5日 「平和を求める夕の祈り」開催へ
心からの平和への叫びを共に！
- 4月8日 教皇、停戦合意を歓迎



記事全文



記事全文



記事全文



記事全文



記事全文



3月31日、記者団に答える教皇レオ14世。トランプ大統領の名前を出し、同大統領を含む世界の指導者たちに、中東での戦争の鎮静化を図るよう訴えた(OSS)

国際

神の名 利用し 戦争正当化 「重大な罪」と枢機卿が批判

【ミラノ3月18日OSV】ラテン典礼エルサレム総大司教ピエルバツティスタ・ピッツァバッラ枢機卿は、戦争を正当化するために神の名を利用することは重大な罪だと語り、神は、政治目的のために宗教を利用する人ではなく、紛争で苦しむ人、亡くなる人と共にいると強調した。

「この戦争や他の戦争の正当化のために、神の名を悪用したり、神の名で操作したりすることは、私たちが犯し得る最も重い罪です」「ほとんどの戦争がそうであるように、何よりもまず戦争は政治的なもので、極めて物質的な利害関係にまみれているものです」

3月15日に国際・オアシス・ファンデーション（ミラノを拠地としたキリスト教徒とムスリム間の相互理解と対話の推進を目的としたキリスト教組織）が主催したウェビナー（オンライン講演会）にエルサレムからテレビ会議で参加した枢機卿は、「見せかけの宗教的な言葉」に対して警告を発した。

「神のことではなく、自らのことを語る見せかけの宗教的な言葉に付け入る隙を与えてはなりません」と、2月28日に米国とイスラエルがイランに攻撃を仕掛けて以来、初めて公の場で発言した。

3月10日の米国防総省のブリーフィング（状況説明会）中に、ピート・ヘグセス同国防長官が詩編144から引用した発言をしたことを受け、枢機卿は信者たちに、宗教的な言葉を利用して紛争をでっち上げる試みは拒絶しなければならないと憤った。

「新たな十字軍はあり得ません」

「神が戦争の中におられるならば、中東中の死にゆく人、苦しむ人、痛みを苦しむ人、さまざまな面で虐げられた人のおられるのです」と述べ、「この紛争には宗教的意味付けがなされますが、それらは操作です。宗教を紛争に持ち込もうとする人は、神の名を利用しているだけなのです」と語気を強めた。

枢機卿は、教皇レオ14世が繰り返し平和を訴えていることにも触れ、その訴えは顧みられそうにないことを認めた。

「私たちは教皇の訴えは無視されるだろうと分かっています。けれども、私たちは真実を伝え続けなければならないのです。この紛争では情報が武器になるからです」

「情報の停電」 忘れ去られたガザ

またピッツァバッラ枢機卿はパレスチナ・ガザを巡って、「情報の停電」が発生していると指摘。ガザでは人道状況が依然として厳しいという。約2百万の人々が家を追われ、領土のほとんどが破壊され、必要最小限の抗生物質を含む医薬品も不足している。

「ガザは忘れ去られています。しかし、状況は依然として悲惨です。ヨルダン川西岸地区でもほぼ毎日、イスラエルからの入植者によるパレスチナの人々に対する攻撃が発生しています」

枢機卿は今でもガザ北部にある聖家族小教区と定期的に連絡を取っている。「飢えの問題は解決しましたが、いまだに2百万人が家を追われ、全てを奪われたままです。ガザの80%は破壊されたままで、再建も始まっていません」

「36ある病院は部分的にしか稼働しておらず、医薬品も不足して、必要最小限の抗生物質さえないのです。人々は文字通り下水の中で生活しています。画像は臭いまでは伝えられません」と枢機卿は現状を説明した。

「この悲惨な状況がどのようにして、いつ解消するのか想像もつきません。（米国主導で、ガザの統治と再建を監督するとされる）平和評議会は何をすべきなのかさえ理解していません。いずれにして

も、ある種の悪循環が起きています。つまり、ハマスが武器を置かないのならば、イスラエルは撤退しないでしょうし、イスラエルが撤退しないなら、ハマスも武器を置くことはないでしょう。全てが行き詰まり状態です」と枢機卿は3月15日に語った。

枢機卿は以前から平和評議会には懐疑的で、2月の初めに平和評議会について問われた時、「他者がパレスチナの人々のことを決めるのですから、それは植民地主義者の行動だと思います」と厳しく批判していた。



2025年12月19日、パレスチナ・ガザにある聖家族教会への司牧訪問で、子どもたちにあいさつするピッツァバッラ枢機卿（OSV）

大雨に銃声、それでも参加 ガザ 受難の主日に希望のしるし

【ガザ（パレスチナ）3月30日OSV】聖地で思いも寄らない希望のしるしが見えた。パレスチナ・ガザの聖家族小教区のキリスト教信者たちが3月29日の受難の主日（枝の主日）に、ミサにあずかり、シュロの葉の祝別と枝の行列に参加することができたからだ。

雨が降り、近くでは銃声も聞こえる中で、予想外に多くの人が集まった。「とても素晴らしい枝の主日を迎えました」と、聖家族小教区主任司祭のガブリエル・ロマネリ神父は、自身のYouTubeチャンネル(<https://www.youtube.com/@P.GabrielRomaneli/videos>)を更新し、その動画の中で語った。当初は安全面と移動の懸念があり、当日のミサ開催がほとんど危ぶまれていた。

「ある時点では、多くの人々の参加は見込めないだろうとか、参加しても恐怖を感じるのではないかと気をもみました」

神父は「この小教区は、かの有名なイエローライン（イスラエル軍が設定した境界線）の近くにあるというだけでなく、移動のための車を見つけるのもとても困難なため」不安が膨れ上がったという。ガザ地区の境界線となっているイエローラインは、2025年の10月の停戦の結果引かれたものだとも言及した。

このラインによって、ガザは二つに分割された。パレスチナ側が支配する区域とイスラエル側が支配する区域だ。そのため、ほとんどのパレスチナ人は西側へ移動せざるを得なくなった。またこのラインは、イスラエルによって徐々にガザ内部へと侵入してきている。

枝の主日の懸念は、現地の状況によっても一層強まった。「大雨でしたし…銃声もあちこちから聞こえていました。これらが同時に起こったのですから」とロマネリ神父は、動画の中で語った。

苦しみを差し出して

ガザで停戦が宣言されて5カ月たつが、ガザの人道状況は依然として厳しい。空爆も続き、市民の犠牲者も出ている。砲撃も銃声も日々聞こえる。それにもかかわらず、枝の主日の行列には予想を上

回る参加者があった。「あらゆる予想に反して多くの人に来てくれました。ここ中東のキリスト教信者は、この行列に愛着を持っています」と神父は語る。

枝の主日には、典礼にとどまらず、困っている人々に援助物資が配布された。「コーヒーとお菓子を分かち合い、難民となった家族に援助物資を渡しました。懐中電灯や食料を詰めた袋などを」と神父は説明した。このような行為は、量は多くないが、さまざまな物が不足する中では意味がある、と強調した。

神父はこの日の典礼をガザやこの地域で広がる苦しみの中に位置付け、聖週間の始まりに当たり平和を呼びかけた。

「神の栄光と魂の救い、罪のゆるしのために、それぞれの方法で私たちの苦しみを差し出しましょう。そうすることで、主は世界に、世界のこの場所に ― 聖地に ―、主の平和と公正で恒久的な平和を全ての人に与えてくださるでしょう」



3月29日、パレスチナ・ガザの聖家族教会でささげられた受難の主日(枝の主日)のミサで、シユロの葉を掲げる侍者の少年(OSV)

教皇の一般謁見講話

信仰守る信徒の使命 3月18日

【バチカン3月18日CNS】洗礼を受けた全てのキリスト者は、教会の使命を分かち合い、聖霊に導かれて教会を刷新し、築き上げていくのにふさわしい者だと、教皇レオ14世は一般謁見講話で語った。

洗礼を受けた全ての人々は、キリストを証しするよう求められており、教会全体は、指導者だけにとどまらず、信仰の真理を保つ役割を担っている、と教皇は3月18日、サンピエトロ広場に集まった訪問客に語りかけた。

第2バチカン公会議とその諸文書についての講話を続ける教皇は、この日も教会に関する教義憲章『教会憲章』と、イエス・キリストの「祭司職、預言職、王職」、すなわち聖化し、教え、統治する職務への一般信徒の参加に焦点を当てた。

教皇は、信者たちは洗礼と堅信を通して「より固く教会に結ばれ」、聖霊によって「特別な力」を与えられるとした。そうして信者たちは「キリストの真の証人として、言葉と行いをもって信仰を広めかつ擁護するよう厳しく求められます」と同文書を引用して話した。



記事全文

教会の位階制の意味 3月25日

【バチカン3月25日CNS】教皇は第2バチカン公会議とその諸文書、特に『教会憲章』の考察をこの日も続けた。教皇は、教会の聖職位階の構造は、ある種の組織的な機能を実現するために「人間的に築かれたもの」ではなく、「キリストが使徒たちに与えた使命を世の終わりまで永続させるための神秘的な制度」だと説明する。

「カトリック教会はキリストにより、その神秘体の生きた柱となる



4月8日の一般謁見の前に、バチカンのサンピエトロ広場をパパモビレ(教皇専用車)で巡り、幼い子どもにあいさつする教皇(CNS)

ことを望まれた使徒たちのうちに、その基盤を見いだします。そして教会には、成員全体の一致と宣教と聖化に奉仕するために働く、聖職位階的な次元があります」

教皇は、使徒たちはキリストの「救いの教え」を忠実に守るよう招かれたので、「使徒たちはその奉仕職をキリストが再び来られるまで、『司牧の任務を受け継ぐ人々の働きを通して』教会を聖化し、導き、教え続ける人々に伝えます」と述べた。



記事全文

信徒の積極的参加促す 4月1日

【バチカン4月1日CNS】教皇レオ14世は、信徒は日々の生活で福音を生き、広めるよう求められており、教会の使命において受け身であるべきではなく、積極的に関わるべきだ、と述べた。

一般謁見で、第2バチカン公会議とその諸文書についての講話を続ける教皇は、聖職者だけでなく、洗礼を受けた全ての人々はキリストの福音宣教を行う弟子たちだと強調した。

「この理由から、信徒は特に生活のあらゆる場でキリストの現存を示すよう、求められています。そうして信徒自身が、キリストのうちに生きることの素晴らしさと、主の恵みが高めてくれる力を証しすることによって、信徒自身が内面から変えられるのです」と教皇レオは4月1日、英語圏の人々に向けた要約の中で語った。

教皇はこの日も『教会憲章』を取り上げ、第2バチカン公会議は、何百年もの間「単に聖職者や奉献生活者でない人々」と定義されてきた、信徒の尊厳に光を当てたと解説した。



記事全文

苦しみの中でも聖性は高まる 4月8日

【バチカン4月11日CNS】教皇はイランを巡る停戦歓迎の談話に続き、今回も第2バチカン公会議の『教会憲章』を取り上げた。聖性について考察し、聖性は全ての信者が共有する召命だと強調した。

「洗礼を受けた全ての人々は、聖人になるよう求められています。つまり、神の恵みを生き、美德を実践し、キリストのようになるよう努めるのです」と英語によるまとめの中で語った。

イタリア語によるメインの講話では、聖性の基盤は愛だと述べ、その愛は「神と隣人に対する完全な愛」だと表現した。その最高の形は殉教で、殉教は「信仰と愛の最高の証し」と呼んだ。全ての秘跡の中で、特に聖体の秘跡は、この呼びかけに応える上で、信者たちを支え続け、奉献生活が果たす重要な役割にも光を当てた。

「実際、教会の神秘の中にすでに存在する神の国のしるしは、奉献生活の全ての経験に形を与える福音的勧告、すなわち、清貧、貞潔、従順です」



記事全文

バチカンの聖週間



3月29日、バチカンのサンピエトロ広場での枝の主日のミサに、シュロの枝を掲げて運ぶ聖職者たち (OSV)

枝の主日のミサとお告げの祈り 主の受難、重なる現代の苦しみ

【バチカン3月29日 OSV】教皇レオ14世は、受難の主日（枝の主日）のミサ説教で、平和の君であるイエスは人類の歴史の中で引き起こされた全ての苦しみを抱きとめ、十字架上から戦争の終結を求めて叫んでいると語った。「主は、戦争を始める人の祈りを聞き入れず、それらの祈りを『どれほど繰り返しても、決して聞かない』（イザヤ1・15）と言われ、退けられます」。教皇は説教の中で「平和の君」という言葉を7回使い、イエスは暴力の犠牲者で、自分を守るために武器を取ることは一切なかったと指摘した。



記事全文

聖木曜日主の晩餐のミサ説教 イエスのうちに示された模範

【ローマ4月2日 CNS】神は勝利を保証するために存在しているのでも、富や権力をもたらしてくれる役立つ存在というわけでもない、と教皇レオ14世は4月2日、聖木曜日主の晩餐を記念するミサで強調した。ミサは伝統にのっとりローマのラテラノの聖ヨハネ大聖堂でささげられた。神はイエスを通して、人間の心を変えつつ、自らを差し出し人間に仕える。そうして人間の心は無条件に他者を愛するよう変えられていくと教皇は続ける。



記事全文



4月2日、聖木曜日ミサで、司祭の足を洗い、口づけする教皇 (CNS)



4月3日、「主の受難」の典礼の初めに、床にひれ伏した教皇 (OSV)

十字架の道行と聖金曜日の典礼 イエスの足跡をたどる生き方を

【ローマ4月3日 CNS】人生はイエスが歩まれた足跡をたどろうとする旅路として生きられなければならない、と教皇レオ14世は4月3日夜、ローマ市内のコロッセオで十字架の道行を終えた後、語った。十字架の道行の前に、教皇はキリストの受難と十字架上の死を記念する主の受難の典礼を司式。受難を象徴する赤の祭服を身に着け、賛美と悔い改めのしるしとして祭壇前の床にひれ伏した。



記事全文

復活徹夜祭ミサ説教 神の愛の力は悪に勝る

【バチカン4月4日 CNS】神の愛はいかなる悪よりも強く、「憎しみを追い払い、権力のある人を打ち倒す」と教皇レオ14世は4月4日、バチカンの聖ペトロ大聖堂でささげられた復活徹夜祭のミサ説教の中で語った。「人は体を殺すことができても、愛の神のいのちは永遠で、死を超えていき、そのいのちを閉じ込められる墓はありません」。ミサは聖ペトロ大聖堂のアトリウムで、火と復活のろうそくの祝福から始まった。



記事全文



4月4日、復活徹夜祭の典礼のために、ろうそくを手にした教皇 (CNS)



4月5日、復活祭のミサ後、人々にあいさつする教皇 (CNS)

教皇、復活祭でのミサ説教 死の力に打ち勝つ主の復活

【バチカン4月5日 OSV】教皇レオ14世は4月5日、バチカンのサンピエトロ広場でささげられた復活祭日中のミサで、キリストの復活によって、「死は永遠に打ち負かされ、もはや私たちに対して力を持たない」と力を込めた。「キリストは死者のうちから復活され、その主と共に、私たちが新たないのちに向かいます」。教皇は、復活祭は「決して裏切ることのない希望と、決して消えることのない光と、何者も奪うことができない完全な喜びを、私たちに示してくれます」と述べた。



記事全文

国際



教皇庁国連常駐オブザーバーを務めるバレストレロ大司教。3月3日の会議で、世界中で約4億近くのキリスト教信者が「迫害や暴力に遭い、キリスト教が世界で最も迫害を受けている宗教共同体になっている」と話した (OSV)

2月20日、スペイン・バルセロナのサグラダ・ファミリア（聖家族聖堂）の最上部に位置する「イエス・キリストの塔」の上部 (OSV)



3月25日、英国カンタベリー大聖堂で、第106代カンタベリー大主教の就任式が開かれ、式の後に手を振るマラーリー大主教 (OSV)



4月4日、ノートルダム大聖堂（パリ）で行われた復活徹夜祭ミサで、聖水を振りかけて人々を祝福するパリの大司教 (OSV)



3月28日、モナコへの日帰りでの使徒的訪問の中で、ルイ2世スタジアムでミサをささげる教皇レオ14世 (OSV)

最も迫害を受けるキリスト教信者 バチカン国連人権理事会で発言

【ジュネーブ3月9日OSV】教皇庁(バチカン)は、国連人権理事会で、迫害を受けているキリスト教信者のために、信教の自由の保護を徹底するよう訴えた。バチカンは、スイス・ジュネーブに本拠地を置く国連の同理事会の常駐オブザーバー。そのオブザーバーを務めるエツレ・バレストレロ大司教は3月3日、ジュネーブで開かれている会議で、世界中で約4億のキリスト教信者が、「迫害や暴力に直面しており、世界で最も迫害を受けている宗教共同体となっています」と発言した。「これはキリスト教信者の7人に1人が被害を受けていることを意味します。さらに深刻なことに、2025年は約5000人の信者が殺害されました。これは平均すると1日に13人が殺されていることになります」



記事全文

報道には十分な検証を 教皇メディア関係者との謁見で

【ローマ3月16日OSV】教皇レオ14世はメディア関係者に、戦争のただなかで苦しむ人々の顔を報道し、プロパガンダ(政治的宣伝)を広めたり、「権力者の代弁者」となったりしないように、ニュースを検証するよう求めた。



記事全文

ガウディの隠された一面 作品に映し出される信仰

【バルセロナ3月20日OSV】スペイン・カタルーニャ州バルセロナでは2026年にアントニ・ガウディの没後100年に向けた準備が進む中、ガウディの非凡な才能と、その人生と作品を形づくった深いカトリック信仰に新たな注目が集まっている。地元の教会指導者たちにとって、ガウディの物語は、彼の生涯にわたる使命となった聖堂(サグラダ・ファミリア)と切り離すことはできない。



記事全文

カンタベリー大主教就任式に当たり 教皇から書簡

【カンタベリー(英国東南部)3月26日OSV】教皇レオ14世は、英国国教会第106代カンタベリー大主教に就任したサラ・マラーリー氏のために祈り、「真理と愛のうちに…恵みといつくしみと平和」を神に願うと約束した。教皇のメッセージは、大主教が3月25日に就任式を行った翌日に届けられた。



記事全文

フランスで洗礼志願者急増 多くは個人的困難から志願

【パリ3月26日OSV】フランスでは今年、2万人超の洗礼志願者が、復活徹夜祭で洗礼を受けると見られている。2025年の受洗者数と比較して20%の増加となる。フランスの司教協議会が3月25日に発表した年次報告書によると、1万3200人以上の成人と8100人の青少年が4月4日の復活徹夜祭で受洗する。リヨン教区のオリビエ・デ・ジャーメイ大司教は、この増加に「驚かされ続けている」と語った。「長年、この消費社会が人間の最も深いところにある強い願望に応えることは困難なことだと感じてきました。ですが今、目の当たりにしている突然の、しかもこの規模の神への渴望に驚いています」と大司教は記した。



記事全文

教皇のモナコへの使徒的訪問 近現代の教皇で初

【モナコ3月28日OSV】教皇レオ14世は3月28日、バチカンの次に小さい国、スーパーヨットとスポーツカーで知られるモナコ公国を訪問し、同国の裕福な市民たちに、貧しい立場に置かれた人のことを思い起こし全ての人のいのちを守るよう求めた。最後の審判では貧しい立場の人々が中心に据えられることを忘れないように、とモナコの大公宮殿のバルコニーから語りかけた。教皇は、「イエスが生涯をささげた神の国は…私たちの間に築かれ、不公平な力の構造を一新します」と述べた。



記事全文

国内

全国シノドス担当者研修会 「ともに歩む教会」づくりに手応え

教会本来の姿である「シノドス的な」（ともに歩む）教会づくりに取り組んでいる各教区のシノドス担当者のための研修会が2月24日と25日、福岡カテドラル大名町教会（福岡市）で開催された。

日本カトリック司教協議会の「シノドス特別チーム」が企画・主催する「全国シノドス担当者研修会」は今回で3回目。司教6人と司祭、奉獻生活者、信徒ら57人が参加し、これまでの取り組みについて振り返り、分かち合った。

日本の教会は、シノドス（世界代表司教会議）第16回通常総会（以下・シノドス総会／2021～24年）で用いられた、「霊における会話」という分かち合いの手法を教区ごとに普及させることを目指してきた。さらに今回の研修会では、ともに歩む教会共同体づくりに向けて手応えもあったという。今年5月の連休明けには、現在シノドス特別チームが制作している霊における会話の「手引書」が完成する。

教区独自の取り組み

シノドス総会を終えた全世界のカトリック教会は、2028年に開かれる「教会総会」に向けた歩みの中にある。目指すのは、教会全体が協力し、社会に向かって宣教する「ともに歩む」教会共同体になっていくことだ。

今回の研修会では、これから各教区や小教区がより「ともに歩む」教会共同体とな

るための手がかりを提供することを目指した。開催テーマは、「みんなでつくろうシノドスの教会」。

参加者は六つの小グループに分かれ、霊における会話を通じて「各教区の取り組みの①現状を知り、②困難・課題について問いかけ、さらに③ともに今、大切な取り組みを見極める」ことを目指し、分かち合った。

シノドス特別チームの小西広志神父（フランススコ会）によれば、今回の研修会では二つの点で「柔軟性」が見られたという。

一つは、霊における会話の進め方だ。霊における会話は原則、第1ステップから第3ステップまで、三つの段階を経て霊的な分かち合いを進めるが、研修会では参加者が状況に合わせて第2ステップまでで終えるなど工夫していたという。霊における会話が普及し、なじんできたためだと小西神父は見ている。

もう一つの柔軟性の現れとは、シノドス特別チームが推奨してきた方法とは異なる

「教区独自の方法」による取り組みが見られたことだ。

これまでシノドス特別チームは、日本の信者もバチカンでのシノドス総会の参加者のように霊における会話に親しみ、ともに歩む体験を重ねていくよう勧めてきた。

これに沿い、例えば広島教区では全小教区から司祭と信徒を1人ずつ集め、約100人が霊における会話を体験。さらに「教区シノドス」（教区代表者会議）として「宣教ひろば」という集いを定期的に関き、霊における会話の手法で分かち合いをしている。

札幌教区や新潟教区でも、霊における会話の普及に向けた取り組みが行われている。

一方、長崎教区は全地区から小中学生を長崎カテドラル浦上教会のある長崎市に招き、皆で集い、学び、祈る「子どもの集い」を開催。「どのような時にも『いつもともにいて導いてくださる』神がいること」を学ぶ機会として企画された集いだった。

小西神父は、こう振り返る。

「この企画には『シノドス』も『霊における会話』も出てきませんが、ともに歩む教会共同体づくりに向けて長崎教区らしい取り組みではないでしょうか。日本のカトリック教会は、すでに『NICEI』

（1987年・第1回福音宣教推進全国会議）と『NICEI 2』（1993年）の時に皆で祈り、聞き合い、分かち合うことを体験しています。シノドス的な教会共同体づくりは、日本で既に始まっていたということもできると思います」



記事全文



福岡カテドラル大名町教会で開かれた「全国シノドス担当者研修会」(写真提供=シノドス特別チーム)

心静まる礼拝体験 聖書の世界へ

エキュメニカルな「子どもと礼拝」プログラム

聖書物語に耳を傾け、イエスら登場人物をかたどった「フィギュア」を用いながら、ゆっくりと聖書の世界に入っていく。そんな礼拝体験へと導く、子どものためのプログラムがある。米国のキリスト教教育学者が提唱した「子どもと礼拝」だ。子どもたちを「一対一で神と出会う」ことのできる存在として見る、モンテッソーリ教育をルーツに持つこのプログラム。日本ではプロテスタント諸教派の牧師や信徒らが2004年に「子どもと礼拝の会」を発足させた。



キリストの死と復活の物語を表すフィギュアは緑色のフェルト上に

「子どもと礼拝センター」（横浜市）では、子ども向けの礼拝のほか、導き手の養成も実施。大人を対象にした礼拝も定期的に行われ、エキュメニカル（教会一致運動的）な祈りの場となっている。



記事全文

60回目の「中国ブロックカトリック高校生大会」

神と出会い 自身を見つめる

60回目となる「中国ブロックカトリック高校生大会（通称：チューブプロ）」が3月28日から30日にかけて、福山暁の星学院（広島県福山市）を会場に開催された。中国地方のカトリック学校在籍者を中心に、各地から中学3年から高校3年までの約100人が参加。

同校の研修センターに宿泊し、松浦悟郎司教（名古屋教区）の講話や分かち合い、レクリエーション、祈りのプログラムを通じて交流を深めた。神との出会いや自分自身と向き合う体験と



福山暁の星小学校体育館で(主催者提供)

なった。60年前、将来的に広島教区から旅立っていく高校生たちに「カトリックの精神を大切にしてほしい」という願いから始まったこの集いは、コロナ禍を除いて毎年対面で開催されてきた。今回のテーマは「PIECE of PEACE」。



記事全文

四旬節に聞く受洗の物語

平和のために働く人になる

岩根俊哉さん(熊本・菊池教会)

熊本県菊池市在住のグラフィックデザイナー、岩根俊哉さん(39)は、大学の後輩でカトリック信者ののぞみさん(38)と2013年に結婚し、3人の子どもを授かった。岩根さんは、二つの転機によって洗礼に導かれた。一つ目は、2020年、体調を崩し仕事を1年半休職した時。二つ目は、体調不良や休職を経験する中で、自分のそれまでの生き方を振り返ったことだ。その中で、自分には「周りの目を気にし過ぎてしまう」ところがあると認識した。



岩根さん家族(本人提供)

「そういう生き方は苦しいと思いました。自己中心ではなく、神の平和のために自分が遣わされていると思える人になりたいと思いました」。岩根さんは24年9月から入門講座を受け始めた。



記事全文

妻の信仰に触れて入信

川越隆暉さん(宮崎・小林教会)

宮崎県都城市在住の会社員、川越隆暉さん(29) =写真(本人提供)=は、かつて働いていた会社の同僚でカトリック信者のグエン・ティ・トゥースオンさん(29)との結婚を機に、信仰に導かれた。



川越さんは高校まで陸上競技に打ち込み、卒業後は宮崎市内に就職。転職を機に、都城市に帰ってきた。以前勤めていた会社で、技能実習生として働いていたベトナム出身のトゥースオンさんと、昨年3月に結婚した。トゥースオンさんから話を聞くうち「自分も信者になろうかな」と思ったのだという。カトリックに対して最初は「怖い」イメージがあったが、修道女や信者たちと話したら「意外と普通だ」と思って安心した。「それなら自分も(信者に)なろうかと思いました」。昨年8月から聖書を学び始め、司祭とも相談して今年の復活祭に洗礼を受けることになった。



記事全文

人物紹介

司祭との“縁”で 勤続40年

鹿児島教区本部事務局 職員 山下真二さん

山下真二さん(67) =写真=の肩書きは「鹿児島教区広報担当」だが、教区本部事務局(鹿児島市)の仕事は、ほぼ何でもこなす。司教、司祭、信徒からの依頼に応じ、隣接する鹿児島カテドラルザビエル教会(同市)を訪れた人からの問い合わせにも、こやかに対応する。毎月、教区報も製作する。カメラを抱えて教会の行事を取材し、記事を書く。原稿の依頼、教区報の編集、印刷・発送手配までを担う。気付けば勤続43年。



小学生の頃、教会学校で世話になっていた司祭を見て、「自分もあんなふうに笑っている神父さんになりたい」と司祭に憧れた。

自分には司祭召命はなかったが、今でも小神学校で共に過ごした仲間の信仰に“本物”を感じている。



記事全文

私の召命物語

電気電子工学を専攻「予測不可能な」宣教の道へ
テオドルス・ジョナタン・ウィジャヤさん

「テオさん」こと、テオドルス・ジョナタン・ウィジャヤさん(28) =写真=は、10年前にインドネシアから来日し、東京大学で電気電子工学を専攻するカトリック信徒。4月上旬に研究のために渡欧するが、その多忙な準備の傍ら、これまで寮(YMCA)の仲間と日常的に使っていたエキュメニカル(教会一致運動的)な祈りの手引きの改訂を進めている。今春から「キリスト者がほぼゼロになる」寮に、祈りの手掛かりを残すためだという。



カテキスタ(要理教師)の両親の下、スマトラ島南部で育ったテオさんが福音宣教へと導かれたのは大学進学時。それまで「美しさ」を感じて取り組んできた数学ではなく、「ランダム(予測不可能)な自然界を表現する」電気電子工学を専攻したことがきっかけだった。



記事全文

その他の国内記事

渋谷で 宗教者ら呼びかけ「武力で平和はつukれない」

JR渋谷駅ハチ公口前の広場(東京・渋谷区)で3月26日、平和な世界の実現に向けて祈り、訴える月1度の「祈念行動」(平和をつくり出す宗教者ネット主催)が行われた。42回目となる今回は、仏教のほかプロテスタントとカトリックの宗教者と市民ら20人ほどが集まった。横断幕などを掲げて「止めよう大軍拡! 戦争をあおるな! 武力で平和はつukれない」などと訴え、それぞれ経を唱えたり、賛美歌や平和を求める自作の歌を歌ったりした。平和を訴える「コール」では、紛争犠牲者が増え続けているミャンマー、ウクライナ、パレスチナなどの平和と自由を願い、また軍備拡張と自然破壊が続く沖縄の平和を求めた。



記事全文

第50回日本カトリック映画賞 呉美保監督『ふつうの子ども』

今年度の日本カトリック映画賞が、呉美保監督の『ふつうの子ども』に贈られることが決まった。受賞作は、子ども同士の人間関係を写実的に描いたもので、賞を主催するシグニスジャパン(カトリックメディア協議会)の顧問司祭、晴佐久昌英神父(東京教区)は、「子役の演じる劇映画でありながら、ドキュメンタリーよりも子どもの真実を映し出すという、不可能に近い二刀流を成功させた」と評価する。授賞式は7月5日、東京・千代田区の暁星学園講堂で。授賞式に続き、上映会と、監督と晴佐久神父の対談も予定されている。



記事全文

ジョットとフランシスコ会 イタリア文化会館で講演会

今年はアッシジの聖フランシスコ没後800年に当たる。その功績をたたえるために建てられた聖フランシスコ大聖堂の上堂に、イタリアの画家・ジョットが、その生涯28場面のフレスコ画を制作したのは聖人の死後70年のことだ。このフレスコ画についての講演会が3月26日、東京・千代田区のイタリア文化会館で開かれ、320人余りが参加した。英国・ケンブリッジ大学教授のドナル・クーパーさんは、ジョットが聖人の生涯の重要な場面である「聖痕」「小鳥への説教」「死」などを強調し、聖人とキリストの生涯の間に類似の関係性をつくり出していること、そして聖フランシスコに、「人類救済」の物語の中の特別な役割を与えていることを説明した。



記事全文

カトリック中央協議会 人事

【2026年4月1日付】

▶尾高修一神父(長崎教区) =カトリック中央協議会事務局長、同司教協議会事務部長(事務課担当)、同法人事務部長。(3月31日付でカトリック中央協議会事務局次長、同広報部長、同出版局長の任を解く)。▶山口一彦神父(さいたま教区) =カトリック中央協議会事務局次長、同司教協議会事務部長(社会福音化事務課担当)、カリタスジャパン事務局担当。▶大久保武神父(大阪高松教区) =カトリック中央協議会事務局次長、同広報部長、同出版局長。

主日の福音解説

5月3日（復活節第5主日）

ヨハネ 14・1-12

動揺を通して信仰へ

今週朗読される福音は告別説教の一節である。ヨハネだけが伝えるこの比較的長い説教は、最後の晩餐^{ばんさん}の席でイエスが弟子たちに語った、いわば遺言のような言葉である（14～17章）。別れの日が近いことを悟り始めた弟子たちに、イエスはまず次のように言う。「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい」。ここで「騒がせるな」と訳されているのは、ギリシャ語の「タラッソー」という動詞である。原意は「水などをかき回す」動作のことだとされている。これが人間の内面について用いられると、「平静を失わせる」、「狼狽^{ろうばい}する」といった意味になる。

興味深いのは、この動詞がヨハネ福音書ではイエスの心情を言い表すときにも用いられていることである。ヨハネは、イエスご自身が心を乱された方であったことを3度、しかもいずれも告別説教に先立つ箇所、タラッソーを用いて描写している。1度目はラザロの死に直面した時、2度目は受難を前にした時、そして3度目はユダの裏切りを予告した時である。師は弟子に裏切られてなお平然としていたのではない。深く動揺し、狼狽したのである。「イエスは、心を騒がせ（＝タラッソー）、断言された。『あなたがたのうち一人がわたしを裏切ろうとしている』」（ヨハネ13・21参照）。告別説教においてイエスは、動揺を知らない方としてではなく、動揺を身をもって経験し、それを通られた方として弟子たちに語っているのである。

ところで、心を騒がせなくてもよい理由として、イエスご自身が「戻って来る」ことを根拠に挙げる。「行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える」。この一文には、ギリシャ語時制の交差が見られる。「行く」「戻って来る」は現在形、「迎える」は未来形という具合に。こうした表現を、異なる伝承や終末論的視点の重なりとして説明する研究者もいる。他方、クレイグ・S・キーナー（1960～）は、これを福音記者の意図的な統合表現として捉える。つまり、告別説教は歴史的には「引き渡される夜」に語られた言葉であるが、福音書そのものは、イエスの死と復活、さらに聖霊降臨を知った教会の中で書かれている。従ってここでは、去って行くイエスと、なお弟子たちと共にいるイエスとが重ねて語られているのである（＝現在形）。ただし、その交わりの完成は、なお将来に向かって開かれている（＝未来形）。



キーナーは、信じる者にとって現在と未来は重なり合って存在していると言う。イエスと共にあることは、いつの日か与えられる約束であるだけでなく、もう始まっている現実でもあるのだ。心が騒ぐときこそ、この真実を思い起こしたい。

くまがわゆきのり
（熊川幸徳神父／サン・スルピス司祭会）

5月10日（復活節第6主日）

ヨハネ 14・15-21

世界広報の日

愛の実践

皆さん、皆さんはイエス様を愛していますか？ 愛しているなら、どのように愛していますか？ 今日イエス様は、私たちにご自分をどのように愛さなければならないのかについて教えてください。

今日イエス様は、私たちにこう言われました。「わたしの掟^{おきて}を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である」。私たちがイエス様を愛しているならば、イエス様の掟を守らざるを得ません。それゆえ、イエス様は今日の福音で次のようにも言われたのです。「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る」。ところが、イエス様が私たちに残して下さった掟はただ一つだけです。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である」。自分なりに愛するのではなく、ここには「わたしがあなたがたを愛したように」という条件が付いています。イエス様は私たちをどのように愛してくださいましたか？ イエス様はご自分の命をささげて私たちを愛してくださいました。私たちはそれほどまでに誰かを愛したことがあるのでしょうか。



私たちが互いに実践できる愛はさまざま、しかも限りがありません。私たちの心がけによって一言、言葉をかけることも愛であり、そっと手を取ってあげることも愛です。さらに、ミサにあずかって朗読したり、典礼奉仕をしたり、聖歌を大きな声で歌ったりすることも神を愛する行為です。自分の知り合いが苦しんでいる時、その重荷を担い合うことも愛ですし、誰かが間違っている道を歩んでいる時、非難したり、叱ったりするよりも、その人に寄り添って一緒に正しい道に戻ってくることも愛です。私たちが誰かに向かい合う時、その人を愛するために今自分が何をしなければならぬのかを考えることが、イエス様の掟を守ろうとする正しい態度ではないかと思います。かつて聖アウグスティヌスはこう話したことがあります。「愛しなさい。そして、あなたが望むことを行いなさい」（『ヨハネの手紙一』についての講話）7、8）。本当にイエス様が言われたように命をささげて誰かを愛するならば、望みが何であっても実践に移しなさいということでしょう。

私たちの中に愛する心が少しでもあるならば、実際に行いましょう。その愛が心の中にあるだけであれば、神様も私たちに対する愛を心の中に持っているままにされるでしょう。私たちが互いに、そして隣の人々に、さらには神様に、私たちの愛を行いによって表すならば、神様もご自分の愛を私たちに直接的に表してくださいます。なぜなら、イエス様が私たちに次のようにはっきりと言われたからです。「わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である。わたしを愛する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現す」

（ダニエル・キム・ドンウク〈金桐旭〉神父／韓国殉教福者聖職修道会）

主日の福音解説

5月17日(主の昇天)

マタイ 28・16-20

「どこにおられますか？」

今日の使徒言行録も福音も、「見る」という言葉がたくさん出ています。お読みになって探してみてください。神様のところに昇られ、姿が見えなくなられたイエス様を、み使いたちは「あの方はおられる」と教えています。そのイエス様はどこにおられるのでしょうか？

20節でイエス様は最後に「わたしが命じたすべてのことを守るように、弟子とした人々に教えなさい」とお命じになりました。

全て教えたことを守るようにと命じられると、私たちはルールを守ることやこれから何かをしなければならぬと考えます。自分が教えを守らなければと考えるだけでなく、人が守っているか、守っていないかを気にしてしまうこともあります。

イエス様は「ほら、見なさい。わたしは世の終わりまでのすべての日、あなたがたと共にいる」、このことを忘れないでくださいと教えられています。私たちの主であるイエス様は私たちの全ての日、時間に一緒にいてくださる方なのです。

ここで今から頑張ること、しなければならぬことを少し横に置いて、皆さん一人一人の人生の中で「あの時、イエス様が私と共にいてくださったんだ」と感じた経験などを思い出してみましょう。

私が簡単に思い出せる記憶は、しつこいようですが、山奥に独りぼっちでいた時のタヌキのポン吉との出会いです(本紙2025年9月号10面:10月19日<年間第29主日>の福音解説参照。右QRコードから)。



(もちろん他にもないわけではありませんが、その話はまた別の機会に)



イエス様はインマヌエルと呼ばれ、「神様はわたしたちといつも共に」を大切に教えてくださるお方です。難しい記憶でなく、そういえばあの時、イエス様が一緒にいてくださった。イエス様が一緒にいてくださらなかったら、あれは無理だったというような思い出はありませんか？

どうしても思い出せない方も安心してください。教会に行ってください。イエス様が必ずおられます。「ほら、見てください」と。

聖堂に静かに輝く赤いランプとご聖櫃、十字架。私たちが守ってきた大切な場所、かけがえのない全ての日です。

イエス様に「ただいま」と声をかけてください。

(寺浜亮司神父/福岡教区)

5月24日(聖霊降臨の主日)

ヨハネ 20・19-23

聖霊を受けなさい

復活したイエスが愛弟子たちの前に姿を現したというのが本日のヨハネ福音書の内容です。イエスが十字架に死んでから三日目、日曜日の夕方の出来事です。

「弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」と説明されています。イエスの仲間だ、弟子だということが知られたならば捕らえられてイエスと同じようにひどい目に遭わされるのではないか、ということで恐れおびえて一つの家に隠れ潜んでいたのです。

この時、弟子たちは激しい後悔の中にいたはずですが。自分たちを愛弟子として選び出し、いろいろなことを教えてもらったにもかかわらず、イエスを裏切り見捨てて逃げてしまったからです。謝ろうにも、イエスは十字架に死んで、もういないのです。体は生きているけれども、心は死んだような状態の弟子たちだったでしょう。



家に閉じこもり、心を固くしている弟子たちのただ中に復活のイエスが現れ、「あなたがたに平和があるように」と繰り返し声をかけます。この挨拶は神があなたがたと共にいてくださいますよという意味です。ゆるしのことばです。イエスは弟子たちを無条件にゆるしたのです。

それだけではなく「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」と宣言し、弟子たちを元通り愛弟子として受け入れたのです。このことは弟子たちにとって「もうこのお方を裏切ることはできない」と決意させるほどの強烈な体験となったに違いありません。

果たして、イエスは弟子たちに「聖霊を受けなさい」と呼びかけます。生前、イエスは繰り返し聖霊を遣わす約束をしていました(ヨハネ福音書14~16章参照)。約束した聖霊を与えるから受けなさい。まさにこのことを言うために復活のイエスは弟子たちに姿を現したかのようです。

続けてイエスは、聖霊によって罪をゆるす権能を弟子たちに委ねます。やがてイエスが約束した通りに弟子たちの上に聖霊が降る時が来ます。その聖霊の促しと励ましによって弟子たちは宣教活動を開始していきます(使徒言行録2・1-11参照)。

この出来事はキリストを信じる小さな共同体(教会)の誕生ということでもあります。教会は聖霊の働きかけによって生まれ、今も同じ聖霊に導かれています。

(立花昌和神父/東京教区)

主日の福音解説

5月31日(三位一体の主日)

ヨハネ 3・16-18

「ゆっくり、丁寧に、心を込めて」

修道会の人事で小学校に勤務していた時、毎朝、正面玄関のマリア様の御像の前で、登校してくる児童たちと挨拶を交わすことを日課としていました。

小学校に入りたての1年生は、マリア様の御像に向かって、習いたての十字を切る動作を、ゆっくり、時には左右を間違えつつも丁寧に十字を切りながら挨拶をします。一方、最高学年の6年生は慣れた動作で、早く教室に行きたいのか、友だちと遊びたいのか、丁寧さが感じられない適当な十字を切るしぐさとなっていました。その都度、やり直しを一緒にしていたものです。

慣れることによって、丁寧さを欠き、神様の思いも意味も考えなくなってしまうのだと、自分自身への警鐘と受け取っています。私たちは十字を切る動作を、日に数回、年に数百回以上していますが、慣れによって適当なものになっていないでしょうか。

三位一体という教義は、分かりやすいものとは言えません。人間が理性と知識によって理解することは困難ともいわれています。

しかし、私たちは主の受難、復活、昇天、聖霊降臨という出来事をこの数週間かけて巡ってまいりました。そこに三位一体を考えるヒントがあるように思います。

結論から言うと、三位一体とは神様の愛そのものです。私たちの罪のために苦しみを受け、十字架につけられ死に至ったイエス様は、その受難の中にあっても多くの人を慰め、ゆるし、人類の救いのために命をおささげになりました。復活によって永遠の命をもたらし、昇天の時に、私たちに生きる意味を教えてくださいました。そして、聖霊降臨を通して初代教会が始まり、神様がいつもそばにいてくださるということを私たちに悟らせてくださいました。

三位一体の主日は、この受難、復活、昇天、聖霊降臨という一連の流れの中で、神様は私たちのことを愛してくださっているということを強く思い起こす日なのではないでしょうか。今日の福音にも「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(ヨハネ3・16)と記されています。イエス様を信じる者は一人も滅びることはなく、永遠の命を受けること、またイエス様が遣わされたのは、世を裁くためではなく、世が救われるためであることも記されています。

神様の愛によってイエス様が私たちのために遣わされ、神様の愛に気付かせ、神様の愛に浸らせ、神様の愛に満たされていることをイエス様ご自身も愛をもって示してくださいました。そして、この三位一体の神様の愛が、目に見える形で表されるのが、次に続くキリストの聖体なのだと思います。

ですから、日に数回、年に数百回以上もの十字を切る動作を、慣れによって丁寧さを欠くのではなく、ゆっくり、丁寧に、心を込めて、神様の愛を感じながら、1年生の子どもたちのような気持ちで十字のしるしができればと思います。

(大水恵一神父/コンベンツアル聖フランシスコ修道会 カットは全て高崎紀子)



文化

短歌

毎月5日まで(必着)、はがきに3首以内。1人1枚を厳守。氏名に振り仮名を明記。送り先は、本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



先の出航を待つ船のごと停泊す夜の玄関に子のスニーカーは 熊本 矢澤 麻子
【評】帰省した息子の大きなスニーカーを船に見立てている。「停泊」に大型船が浮かび、明日はまた遠くへ働きに出る息子へエールと無事を祈る母のまなざしも、感じられる。
先の先すべて読みたる加藤一二三銀を繰り出す駒音高し 三鷹 関 静男
寂しさをサラサラこぼし登る坂空つぼな風と凜と立つ胡桃 逗子 田丸 有希
花窓玻璃はまだ見ぬ土地のものらしい炬燵から出る理由がひとつ はっとり めぬ
異国への遠き憧れ この心をFalconと知る独語辞書 東京 笹浦 泉
カップにはレモンの輪切り淹れたてのニルギリ注ぎて春の香を聞く 広島 瀬尾 直子
「ばんざい」を聞きたくなくてテレビ消す たちまち静かな雪景色の夜 横浜 西前 敦子
わが掌もてしてあげたかった夫の掌に悔ひのひとつにアロマテラピー 横浜 森山美智子
隣家より鳩サブレを頂きぬ小鳥の声を褒めしお礼と 東久留米 平山 努
久方の雪に埋もれし黄の花が名は董小さくも強し さいたま 古閑 和則

俳句

稲畑廣太郎選

毎月5日まで(必着)、はがきに5句以内。氏名に振り仮名を明記。送り先は本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



◎落椿見上ぐる空の青さかな 大牟田 岩永美智子
【評】落椿に未だある生気を確と感じている作者
◎麦の芽や生後十日の受洗式 東京 山口 岳人
【評】幼児洗礼の尊さを季題に託して詠んでいる
寒風や祈りの列の西坂へ 長崎 中ノ瀬小夜子
冬薔薇滲みし色の強さかな 秦野 小泉早由美
下萌の丘容赦なくブルドーザー 和泉 中里 君子
春寒し母の電話にある孤独 芦屋 平田ひろみ
誓願の知らせ友から春近し 豊橋 赤澤 進
十字切る指ぎこちなく年暮れる 川崎 小田 俊作
道行きの静かな祈り春浅し 春日井 遠藤 晶子
指先をあたため弾く雪のミサ 宇部 中村 清子
旅立ちを忘れ波間の残り鴨 福岡 三谷 淑美
日当りを気にす花屋に二月尽 西東京 一色 菊江
鈍色の髪梳く如し朧月 府中 荒井 美邦

投稿規定 短歌・俳句共に、未発表の自作をはがきまたはオンラインでお送りください。一回につき短歌は1人3首まで、俳句は5句まで。お名前に振り仮名を付けてください。はがきの送り先は、〒135-8585 東京都江東区潮見2の10の10 カトリック中央協議会広報部広報課「短歌係」または「俳句係」。締め切りは毎月5日(必着)です。作品は選者の先生によって添削されることがあります。オンライン投稿フォームが4月から新しくなっています。QRコードは今号のものをお使いください。

うかれ猫恋のやつれかうたた寝か 神戸 平尾 孝子
春風や水平線のいさぎよき 仙台 三宅 温子
荒波の岩間に遊ぶ波の花 名古屋 成田 友子
鱈船大漁旗を靡かせて 選者吟

訃報

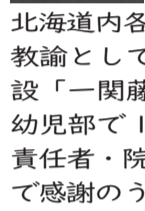
※カトリックジャパンニュースに全文を掲載



柏本(かしもと)洋子修道女(福音史家聖ヨハネ布教修道会) 2月23日、東京都小金井市内の病院で逝去。84歳。1941年滋賀県生まれ。66年同会入会。70年初誓願。75年終生誓願。73年から同会運営の桜町病院(東京)の内科医師として勤務。修道会では2003年から13年まで総長も務めた。何事にも熱心で誠実であり、ただ主イエス・キリストへの愛のために、真っすぐに生きた。



平澤圭子修道女(殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会) 2月23日、北海道石狩市内の同会修道院で老衰のため逝去。89歳。1936年北海道生まれ。56年同会入会。59年初誓願。64年終生誓願。北海道内各地の藤幼稚園で幼稚園教諭として44年間、児童養護施設「一閑藤の園」(岩手)の主に幼児部で12年間勤務。共同体の責任者・院長も務めた。幼子の心で感謝のうちに過ごしなが、歌や絵、存在を通して神を賛美した。



浅野みのり修道女(殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会) 2月26日、北海道・月形町の病院で老衰のため逝去。99歳。1926年宮城県生まれ。52年同会入会。55年初誓願。59年終生誓願。札幌の藤学園の寄宿舎、北海道、青森、岩手、東京の同会修道院でも奉仕し、うち5カ所では院長の務めも果たした。主任司祭の紹介により、10時間以上かけて一人で見知らぬ土地だった札幌の同会修道院を初めて訪れ、修道生活を歩み始めた。最後まで感謝のうちに生きた。



山本孝子修道女(殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会) 2月28日、北海道石狩市内の同会修道院で総胆管がんのため逝去。96歳。1929年北海道生まれ。51年同会入会。54年初誓願。59年終生誓願。28年間を藤学園(北海道)の女子教育のため、その後の28年間を児童養護分野に力を注いだ。着衣



式は藤学園創立者のベンチェスラオ・キノルド司教が帰天した3カ月後だったが、その時にキノルド司教の名を修道名に受けたことを誇りに思っていた。

有末芳枝修道女(ショファイユの幼きイエズス修道会) 3月4日、兵庫県宝塚市内の介護老人福祉施設で老衰のため逝去。94歳。1931年山口県生まれ。初誓願宣立後、病院や養護施設、各地の信愛女学院の事務の担当として奉仕。69年からは同会仁川本部修道院(兵庫)で、タイピストとして誠実に務めた。優しく丁寧な言葉で出会う人々に語りかけ、信仰のうちに奉献の日々をささげた。



ガレアニ・アレッシンドロ神父(聖ザベリオ宣教会) 3月5日、同会日本管区本部修道院で老衰のため逝去。91歳。1934年イタリア・ローマ生まれ。58年司祭叙階。翌年来日し、大阪教区(当時)岸和田地区で7年間司牧。75年からの3年間は日本管区長として会員を支えた。大分教区では40年以上にわたり、小教区司牧と幼稚園教育に力を注いだ。静かで誠実な人柄と、誰に対しても寄り添う姿勢が多く、信徒の心に深い敬愛を残した。



金松ノブエ修道女(ショファイユの幼きイエズス修道会) 3月9日、熊本市内の介護医療院で老衰のため逝去。97歳。1928年長崎県生まれ。福岡サン・スルピス大神学院(福岡)、奄美大島(鹿児島)の名瀬天使園、長崎のマリア園(当時/児童養護施設)ほか各地の同会事業所や修道院内で奉仕した。晩年も教会や社会の動きにも関心を持って祈り、見舞う人を励まし、ロザリオを手に祈ることに心を燃やしていた。



加賀ツエ修道女(殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会) 3月15日、北海道月形町内の特別養護老人ホームで脳梗塞のため逝去。94歳。1931年青森県生まれ。56年同会入会。59年初誓願。64年終生誓願。初誓願宣立後は各地



にある同会修道院内で奉仕した。強い意志を持ち、何事も喜んで一生懸命に務めた。同会師父アッシジの聖フランシスコの娘として大自然を、そしてきょうだいのように動物を大事にした。共同体および個人の祈りを大切に、聖堂で静かに祈ることを好んだ。

峰徳美(とくみ)神父(長崎教区) 3月15日、長崎市内の病院で心不全のため逝去。88歳。1937年長崎県生まれ。62年司祭叙階。稲佐、中町、紐差(ひもさし)、浜脇、大曾、植松、水ノ浦、黒崎、大浦の各小教区で司牧した(以上長崎)。どの場所に置かれても、そこで出会う人々と一緒に司祭職を生きる司祭だった。



夫津木(ふつき)勇雄修道士(聖パウロ修道会) 3月20日、東京都内の病院で肺がんのため逝去。99歳。1927年長崎県生まれ。48年同会入会。51年初誓願。福

岡や大阪、東京の同会修道院で、志願者のアシスタント、同会出版物の普及や印刷の使徒職に就いた。質素に生き、清貧の生活を実践した。主キリスト自身が惜しみなく与えたように、種々の共同体で惜しみなく奉献した。

西山達也神父(コンベンツァル聖フランシスコ修道会) 3月28日、誤嚥(ごえん)性肺炎のため逝去。92歳。1934年広島県生まれ。48年同会入会。54年有期誓願。58年終生誓願。60年司祭叙階。1979年から94年までローマに派遣され、聖ヨハネ・パウロ2世教皇が81年の来日に向けて日本語を学ぶ際に、協力した経験を持つ。修道会の文書、聖マキシミアノ・マリア・コルベ司祭殉教者の伝記などの翻訳にも従事した。人前で目立つことを避ける一方、さり気ない思いやりを示す司祭だった。



告知板

■千葉

▶「聖書と美術の講座—天国の扉—」5月20日(水)午前10時30分~正午、カトリック船橋学習センター・ガリラヤ講座室(定員35人)またはオンライン(講座終了後、オンデマンド配信あり)。講師=アンドレア・レンボ補佐司教(東京教区)。詳細はウェブサイトを確認の上、要申込。無料(寄付歓迎)。電話 047-404-6775 ガリラヤ

■兵庫

▶聖堂に響くヴィヴァルディ&クラシック名曲集 夏 5月9日(土)午後2時、神戸中央教会。出演=延原武春(指揮)、高田泰治(チェンバロ)、浅井咲乃(バイオリン)、テレマン室内オーケストラ。曲目=ヴィヴァルディ「四季」より「春」「夏」他。前売り3,000円、当日3,500円。電話・ファクス 078-252-1966、☒ kobe-bible-housu@maia.eonet.ne.jp KBH支援委員会

番組

ラジオ心のともしび

(朗読・坪井木の実) 5月の放送日と執筆者 1日(金)山本久美子・2日(土)熊本洋(よう)・4日(月)植村高雄・5日(火)古川利雅・6日(水)崔友本枝(ちゅー・ともえ)・7日(木)中井俊巳・8日(金)松浦信行・9日(土)服部剛(ごう)・11日(月)三宮麻由子・12日(火)萩原久美子・13日(水)松本准平(じゅんぺい)・14日(木)下窄優美(しもさこ・ゆうみ)・15日(金)中島貴幸・16日(土)越前喜六・18日(月)こいずみゆり・19日(火)山本

ふみり・20日(水)許書寧(きょ・しゅにん)・21日(木)古橋昌尚・22日(金)片柳弘史・23日(土)村田佳代子・25日(月)コリーン・ダルトン・26日(火)森田直樹・27日(水)岸本景子・28日(木)堀妙子・29日(金)竹内修一(おさむ/以上テーマ「試される」)・30日(土)今井美沙子(テーマ外「いつくしみ」)。

ウェブサイト(下記QRコードでアクセス可)では24時間視聴可能。心のともしび、詳細は電話 075-211-9341。



きょうをささげる(教皇による祈りの世界ネットワーク)5月

【教皇の意向:すべての人に食べ物を】

大規模な生産者から一人ひとりの消費者に至るまで、すべての人が食品ロスの削減に取り組むことによって、誰もが良質な食べ物にあずかることができますように。

【日本の教会の意向:子どもたち】

子どもたちのために祈ります。神、そして多くの人たちとのつながりの中で、子どもたちが愛されていることを実感することができますように。

国連の報告では、2022年の1年間に、世界で食品全体の約3割(約10.5億トン)が廃棄されているとのこと。そのうち生

産や流通段階での規格外、過剰生産、短期の賞味期限などによる廃棄が約13%、また家庭での食べ残し廃棄が60%に上るといいます。その一方で約7億人の人々が必要な食糧を得られないでいます。イエスはパンの増加の出来事において、感謝の祈りをささげ、皆が満腹した後「無駄にならないようにパンを集めなさい」とおっしゃいました。全ての食べ物は神からの恵みのたまものです。無駄にならないよう食品を生産・加工・輸送・販売しましょう。全ての人に食べ物がいきわたるよう配慮し、感謝のうちに食べ、自然の循環を考えながら食品ロスを減らせるよう祈りましょう。

*

日本ではおよそ9人に1人の子どもが貧困状態に置かれ、ひとり親家庭ではそれが4割以上になるといわれています。両親がいても、家庭での心理的虐待を含む児童虐待の問題も報告されています。世話は受けても関係が希薄で、孤独を抱える子どもたちも多くいます。私たちは三位の神の似姿として、神の恵みによる尊厳を持ち、根本的に無条件の愛の交わりに開かれた存在です。子どもたちが存在の最初から愛の交わりに触れ、人間らしく成長し、人々と愛の交わりを豊かに生きることができるよう、子どもたちのために祈りましょう。